

# 高梁の文化財 ①

市には、優れた文化財がたくさんあります。今月号から、高梁の文化財を学芸員などの専門的な視点で探り、皆さんに紹介します。

## 絹本着色 釈迦三尊像

中央には、獅子が下で伏せている台座に正面を向いて座る釈迦如来を描き、脇侍として向かって右側に獅子に乗った文殊菩薩と、左



国指定重要文化財 鎌倉時代  
絹本着色釈迦三尊像 頼久寺蔵／奈良国立博物館寄託  
寸法 (cm) 縦133.3 横87.4 1 幅

側に6本の牙を持った白象（六牙白象）に乗った普賢菩薩を配置した仏教絵画（仏画）です。

釈迦如来は仏教の開祖釈迦牟尼仏（ゴータマ・ブツダ）のことです。その姿には、両肩から頭を囲むように頭光と、座る姿の両膝から全身を囲むように円光とが描かれており、金色を表す黄色の肌に、赤い衣を着けています。衣以外の装身具は悟りを開いた者として、一切着けていませんが、袖口に見える布や敷物には繊細な文様が表現されています。

文殊菩薩は諸仏の智慧を象徴する菩薩です。「菩薩」は本来、悟りを開く前の釈尊を示しましたが、次第に多くの人々の救済者として考えられるようになり、信仰を集めました。

頭上には頭光が描かれ、肌はやや黄色く、袈裟をまとい、両手に※如意を持ち、頭には豪華な宝冠をかぶり、耳飾りや胸元には首飾りを着けています。また、獅子の足元には赤い衣をまとった従者がいるのも見えます。普賢菩薩は賢人の働きや修行を象徴する菩薩です。文殊と

同じく頭光が描かれ、肌は白く、衣をまとい、両手には紅の蓮華を持ち、文殊と同じように宝冠をはじめとした装身具を身に付けています。また、六牙白象の足元には片肌脱ぎで鉢

本像は釈迦三尊の形式では最も多い組み合わせと考えられ、ほかの遺品もいくつか残されています。描き方には宋・元の時代（11世紀初め～14世紀前期）の中国で描かれた仏画の影響が見られます。例えば、釈迦の※肉髻が低く描かれたり、両側に二本の線を引いて鼻筋を表現したりしている部分がそれです。

また、文殊が袈裟をまとう姿や両脇侍の装飾性の高い宝冠などもその影響であると見られています。

制作された時期は鎌倉時代と考えられますが、こうした形式、特徴、時代の遺品の中にあつて、きわめて優品であると考えられており、昭和34年（1959）、国の重要文化財指定を受けています。※禅宗の一つである臨済宗の頼久寺に伝わりました。

※如意—仏教での威儀具。本来は背中をかいたための道具。  
※肉髻—仏、菩薩の頭の頂上にある「もどり」のように一段盛り上がった肉塊。  
※禅宗—坐禅によって仏道をきわめようとする仏教の宗派。中国で生まれた。

（文・歴史美術館学芸員 加古一朗）

編集と発行(毎月15日発行) 高梁市総務部企画課

〒716-8501 岡山県高梁市松原通2043 電話0866(21)0210 ホームページアドレス <http://www.city.takahashi.okayama.jp/>



この印刷の一部には水質保全に有効な水なし印刷方式を採用しています。



環境にやさしい大豆油インキを使用しています。



古紙パルプ配合率100%再生紙を使用しています。